第 9 回　「イラク・映像で見る首都バグダットは今」

日時：7 月 13 日（水）　午後 7 時～午後 8 時 30 分
会場：龍谷大学　大阪梅田キャンパス　研修室
講師：玉本　英子
　玉本英子の現場日誌　http://www.asiapress.org/apn/archives/2000/1053/
所属：アジアプレス・インターナショナル　URL http://asiapress.org/

　アジアプレス・インターナショナルは、文章や写真、映像を通して、アジアなど世界の様々な問題を伝えていこうとする独立系ジャーナリストの集団です。玉本さんは、クルディスタン地域、コソボ紛争、アフガニスタンの女性たちなど、紛争や圧政下で生きる市井の人々に焦点を当て、ビデオを中心に取材を行ってきました。そうした取材は、今まで「報道STATION（ステーション）」や「NEWS23」などにとりあげられています。今年の 3 月から 5 月には、フセイン政権時代から数えて 11 度目のイラクへの取材を行いました。ドキュメンタリー映画『ザルミーナ・公開処刑されたアフガン女性を追って』(2004) を監督したほか、主な著書には『アジアのビデオジャーナリストたち』（共著、はる書房）などがあります。

講座概要

　フセイン政権崩壊から 8 年を迎えたイラクの首都バグダッド。人びとに降りかかった惨禍は今も続いています。「独裁からの解放」とともにこの国にもたらされた占領、イラク人どうしの殺し合いと対立。そのはざまで、行き場を失った人々が必死に生きなければならない日常があります。そうした 8 年を経たバグダッドの姿を、玉本さんは今年 3 月から 5 月まで現地で取材しました。講座では、厳戒態勢の中で開催された東日本大震災復興支援チャリティコンサートの様子も交え、最新の情報を貴重な映像とともにお話していただきました。

イラク戦争開始から 8 年を経て　イラク戦争終結宣言、宗派間抗争の激化

　イラク戦争は 2003 年 3 月、大量破壊兵器を保持しているなどの理由から、アメリカ合衆国が主体となりイギリスなどが加わる有志連合がイラクに侵攻したことで始まりました。連合軍とイラク軍の戦闘は 2003 年中に終了しましたが、政治・治安は引き続き不安定な状況が続きます。2007 年の 2 月には、アメリカ軍とイラク軍による大規模な武装勢力掃討作戦が開始され、以降の治安情勢は少しずつですが改善されてきました。その後 2010 年 8 月 31 日にオバマ米大統領によって正式にイラク戦争の終結が宣言され、イラクには平和が戻ったかのような伝えられ方がされています。しかし、増幅する宗派間抗争や散発的な爆弾、暗殺など、民間人を含む多くの人々が未だ犠牲となり苦しんでいます。

　玉本さんは、この戦争で一番悲惨に思うことの一つに宗派間抗争をあげました。イスラム教には大きく分けて二つの宗派があります。全イスラム教徒の約 9 割がスンニ派ですが、イラクではシーア派が人口の約 6 割を占め、約 2 割がスンニ派、残りはクルド人（多くがスンニ派）で、キリスト教、原始宗教などの少数派といわれています。旧フセイン政権下では少数のスンニ派が権力を握っていましたが、フセイン政権崩壊後はシーア派が政治に影響力を持つようになります。

　2006 年 2 月、シーア派の聖廟がスンニ派のアルカイダに爆破されたのを契機に、二つの宗派間抗争が激化しました。抗争の背景には、紛争を煽り対立の構造を作りだすという外国諸国を含んだ政治的思惑があり、決して宗教や教義による対立ではありません。

イラク人同士の抗争が残した傷跡

　2006 年以降、シーア派の民兵とスンニ派の武装勢力の抗争はさらに激しさを増し、二つの宗派が共存してきたバグダッドでは極度の治安悪化でメディアも入ることができない状況が続きました。そうした中、玉本さんは、2007 年 4 月、武装勢力が対峙し宗派間抗争が最も激しかったバグダッド南西部のアメル地区の取材を敢行します。銃弾が飛び交い自爆攻撃が繰り返されたこの街は、行政機能が完全に麻痺し、破裂した配管から汚水が町中に流れている有様です。子どもたちでさえ、自分と家族の命を守るために

自身の宗派を答えることが出来ない状況でした。その結果、50 万人いた住民の半分が土地を離れることになりました。イラク戦争がはじまり 10 万もの人が亡くなったと報道されますが、その半数近くは宗派間抗争が原因で命を落としたイラクの市民です。

4 年ぶりに訪れたバグダッドアメル地区の女子中学校
生徒たちの多くが避難先から戻っていた（2011 年 4 月撮影）

今年の 3 月、玉本さんは再びアメル地区を取材します。4 年前には人の姿が見えなかった大通りですが、今では少しずつ店も再開し、買い物をする人が行き交い、状況は幾分か改善されているようです。学校にも徐々に生徒が戻り、子どもたちの笑顔が見られるようになりました。学校近くの文具店には、ディズニーのキャラクターシールなどが並び、アイドル歌手の写真も人気です。一見平和を取り戻したように見受けられますが、自爆テロに代わってサイレンサー（消音器）銃による暗殺が増え、町には破壊された建物も多く残っています。元気に過ごす子どもたちですが、家族を殺された子も多くいることを忘れてはなりません。また、刑務所での拷問や宗派間抗争による死亡など、政府に原因の調査を求める抗議活動が見られるなど、いたるところで深い傷跡を残していることがうかがえます。

劣化ウラン弾が残したもう一つの傷跡

玉本さんは、イラク戦争が残したもう一つの傷跡、劣化ウラン弾が及ぼした影響を指摘します。劣化ウラン弾とは、核燃料や核兵器を製造する際、天然ウランを濃縮する過程でできる放射性廃棄物を利用するためコストがかからず、その上、従来の砲弾と比べ貫通効果が高く威力が格段に増した兵器です。バグダッド郊外の“戦車の墓場”（劣化ウラン弾などで破壊された戦車などが野ざらしになっている場所）からも、その凄まじさが容易に図り知れます。さらに恐ろしいことは、放射性物質を放出し、空気や水、食べ物などを通じて体内被曝をおこすとも考えられていることです。

玉本さんは、5 月にバグダッド市内の子ども病院のがん病棟を取材しました。湾岸戦争後、イラクの南部地域に白血病患者が増えたことは周知のとおりですが、今回の戦争でもその因果関係が疑われています。5 歳未満の子どものがんなどによる死亡率が増加しているのは、劣化ウラン弾による被曝が原因と疑われますが、これに対しアメリカは、使用した劣化ウラン弾はごくわずかであり、健康に害は及ぼさないと繰り返し主張してきました。

病棟には日本の NGO の支援によって設置された院内学級があります。長い期間入院生活を強いられる子どもたちには、勉強や絵を描いて遊べる場所が必要です。そこには、治療を受け回復した子どもたちの写真とメッセージが掲示され、入院している子たちや治療に当たる医療関係者の希望にもなっています。白血病の治療は高度な医療技術と長期間の入院が必要となるため家族の経済的負担も少なくありません。そうした中、日本をはじめとする各国の支援もあり、治癒率が少しずつ上がっていることも事実です。しかしながら、今も小さな命が、がんや白血病などで失われていくのです。

イラクの人々による復興支援チャリティコンサート

4 月の終わりに、東日本大震災の復興支援コンサートがバグダッド市内で開かれました。地元の青少年交響楽団は、未だ治安が不安定な中、音楽学校に通い練習を重ねてきました。通常、こうしたコンサートでは多くの聴衆を集めるため大々的に広報しますが、イラクでは攻撃の対象になることを避けるため、口コミによる広報活動しかできませんでした。それにも関わらず、会場には以前日本に住んでいた人や JICA の研修に参加したことがある人など、200 人ものイラク市民がかけつけ、「上を向いて歩こう」など日本の楽曲も演奏されました*。演奏終了後、日本の NGO の支援で再び楽器を手にして、音楽の勉強を続けてきオーボエ奏者の学生が、玉本さんにメッセージを託します。「私たちの国はこの 8 年間、ずっと戦争が続いてきました。震災で家や家族を失った日本の人たちの気持ちがわかります。皆さんを思う私たちがいることを忘れないでください。」

最後に玉本さんは、私たちもイラクの人たちの苦しみや悲しみを忘れてはならず、今後も関心を持ち続けることの大切さを強く訴えました。

*　バグダッドでの東日本大震災復興支援コンサートの様子は下のサイトからご覧いただけます。
「上を向いて歩こう」震災支援コンサート・バグダッド　撮影・玉本英子：　http://www.youtube.com/watch?v=kSVuwhMqLig